

イラン人の不屈の精神の源流 —「イラン人」アイデンティティの歴史的形成とイスラーム共和国体制の課題—

文京学院大学ヒューマン・データサイエンス学部 准教授

貫井 万里

1. はじめに

2026年2月末、アメリカとイスラエルは、「核兵器取得の阻止」を理由にイランへの軍事攻撃を開始した。核交渉の最中の対イラン攻撃は外交的な解決の道を閉ざす「国際法違反」と批判する意見もあった。しかし、日本を含め先進国の多くは、トランプ米大統領からの戦争協力の要請を回避することに注力し、アメリカとイスラエルに攻撃停止を強く求めるには至らなかった。

緒戦でハーメネイー最高指導者をはじめとする要人多数が殺害されたにもかかわらず、イランは米軍基地を擁する国々やイスラエルに次々と反撃した。特にホルモズ海峡封鎖は世界経済に甚大な影響を与えた。天然ガスや石油を運搬できないまま船舶がペルシア湾内に滞留したため、エネルギー価格の高騰や石油製品の供給不足、そしてアジア諸国で電力不足を招いた。

トランプ大統領の「イランの文明を破壊して石器時代に戻す」という発言は、世界に誇る文明を数千年にわたって築き上げてきたイランの人々の誇りを踏みにじるものであった。実際に今回の戦争でユネスコ世界文化遺産に指定されているカージャール朝のゴレスタン宮殿や「世界の半分」と称された古都イスファハーンの数々の文化遺産が被害を受けた。

本稿では大国の圧力にもかかわらず、不屈の精神で抵抗を続けるイランの強さの秘密を探るために、「イラン人」アイデンティティの成り立ちと、イラン・イスラーム共和国の直面する課題を概観する。

2. 「イラン」と「ペルシア」

「イラン」の国名は、古代イラン語で「アー



イスファハーンのイマーム・モスクのタイルの一部が空爆の衝撃波で損傷（出典：Miras Aria News Agency, posted on 8 March 2026, <https://www.chtn.ir/>, accessed on 29 July, 2026）

リア人の土地」を意味する「アリアーナーム Aryānām」に遡る。中央アジアで遊牧生活を営んでいたアーリア人の祖先の一部が、紀元前二千年頃から南下してインドとイランに定住した。紀元前6世紀にオリエントを統一したアケメネス朝のダレイオス1世は、自らの碑文のなかで「アーリア人」の子孫であることを誇らしげに宣言している。この大帝国の脅威に晒された古代ギリシア人は、帝国の中心地のファールス地方にちなんで帝国全体を「ペルシス Persis」と呼び、そのラテン語形の「ペルシア」という他称が定着した。サーサーン朝期に「アーリア」という言葉は「イーラーン Ērān」へと変化した。この時期に非イラン人の住む地と境界を画す「イラン人の国（イーラーン・シャフル）」という政治的な概念が形成されたと考えられる¹⁾。

7世紀にアラビア半島でイスラームが出現し、新たな信仰によって結束したイスラーム勢力は一気呵成に周辺地域を征服した。征服地の多くがア

ラビ化したのに対し、イランの人々はイスラームを受け入れつつも、自らの言語を維持し続けた。イラン人は、官僚として征服王朝の実務を担い、詩人や知識人として宮廷文化の華となることで征服者をペルシア化し、イラン文化の核となる詩や書物を継承してきた。11世紀以降、セルジューク朝などのトルコ系王朝がイランを軍事的に支配したが、支配者たちはペルシア文化の洗練された魅力に心酔し、ペルシア語を宮廷語として採用した。

11世紀に活躍した詩人フェルドウーシーは世界の創造から7世紀のサーサーン朝崩壊に至るまでのイランの歴史を国民的叙事詩『王書』^{シャハナマ}に著した。そのなかで暴君ザッハークを倒した英雄フェレイドゥーン王の三男、イーラジ王子の治める正義の象徴たる「イーラーン」と次男のトゥール王子が治める邪悪な外敵「トゥーラーン」（非イランの遊牧民）との果てのない戦いで活躍した英雄たちの物語や悲劇的な死が描かれる。この伝説的な物語では、文明の地「イーラーン」とアムダリア河の向こうの遊牧世界「トゥーラーン」が対比され、彼の地からきたトルコ系遊牧民に軍事的に支配されてしまったイラン人の忤怩たる思いとかつての栄光への誇りが作品に反映されている。

3. 国境の画定

現在のイランの国境は、17～19世紀にかけて画定された。1639年にオスマン帝国とサファヴィー朝の間で締結されたゾハープ（別名ガスレ・シーリーン）条約において、ザグロス山脈の西側からシャットル・アラブ川が両国の国境に定められた。ただし、帝国の中心部から離れた辺境の地への支配は比較的緩く、両国境にまたがって住むクルドやアラブの部族は20世紀に近代国家が成立するまで従来通り自由に往来した。

19世紀以降、不凍港を求めて南下するロシアの圧力で、カージャール朝はコーカサスの領土を次々と失っていった。1828年のトルコマンチャーイ条約においてアラス川をイラン－ロシア国境線とするほぼ現在の国境が画定された。これによって同じトルコ系のアゼリー人の住む地は、

イラン領内のアゼルバイジャン地方とアゼルバイジャン共和国に国境で分断された。

東側の国境はイギリスとの争いのなかで形成された。1837年にカージャール朝がロシアの支援を得て、ホラーサーン東部の都市ヘラートの奪回を目指して進軍したが、アフガニスタンを植民地インド防衛の緩衝地帯として確保しようとするイギリスが介入したため、失敗に帰した。さらに英領インド軍はペルシア湾とアラビア半島を占領して保護国化し、イギリスは1971年末の撤退までのこの地を支配した。19世紀後半、ロシア帝国は中央アジア一帯を征服し、1881年のアハル条約によってアトラク川をイランとの国境と定めた。

このようにイランは、かつてのサファヴィー朝期の領土を周辺国に削られながらも、当事国として国境画定に参画した。この点が帝国列強による植民地獲得競争のなかで人為的に国境線が画定された国々と大きく異なっている。古代アケメネス朝からサーサーン朝、そしてイスラーム勢力やトルコ系遊牧王朝やモンゴルの支配を経てサファヴィー朝で栄華を誇ってきたイランの中核をずっと国土として擁してきたという自信と誇りがイラン人のアイデンティティの核となっている。

4. 民族と宗教

それでは、現在のイランにはどのような人々が住んでいるのだろうか。1907年にイランで初めて憲法が制定されて以来、ペルシア語が公用語に定められてきたが、ペルシア語を母語として話すペルシア人は6割に過ぎず、「イラン人＝ペルシア人」と考えるのは誤りである。推計によれば、ペルシア人61%、トルコ系アゼリー人が16%、クルド人10%、アラブ人2%、バルーチ人2%、トルコ系トルクメン人2%と、多様な民族から構成される（CIA, The World Factbook 2016 est.）。

さらに、宗教を見ていくと、アケメネス朝とサーサーン朝の国教は、世界を善神アフラ・マズダーと悪霊アーリマンの善悪の根本的な対立を根底におく二元論に基づくゾロアスター教であった。7世紀にサーサーン朝がイスラーム勢力に征

服されると、ゾロアスター教からイスラームに改宗する人が増加し、10世紀までにムスリムが人口の7～8割を占めるようになったとされる。イランでシーア派が主流となったのは16世紀以降のことである。スンナ派の盟主を標榜し、メソポタミア地方への支配拡大を狙うオスマン帝国との対抗上、サファヴィー朝の国王は十二イマーム・シーア派を国教として採用した。

現在では、ムスリムが98.5%を占め、そのうち、シーア派が90～95%、スンナ派が5～10%、キリスト教徒0.7%、バハーイー教徒0.3%、ゾロアスター教徒やユダヤ教徒などその他の宗教の信徒0.5%である（CIA, The World Factbook 2020 est.）。

5. 「イラン国民」としての意識の覚醒

歴史的に育まれてきた「イラン人としての一体感」が強化され、近代的な国民国家を支える「イラン国民としての意識」が芽生えたのは、19世紀末のことである。トルコ系のカージャール族の支配下でイランはロシアとの2度の戦争に敗れ、屈辱的な不平等条約を押しつけられた。ロシアとイギリスは腐敗したカージャール朝の国王とその取り巻きに賄賂を渡して、様々な利権を獲得した。

1890年にタバコ利権が英国商人のタルボトに付与されると、タバコ商人たちが中心となってイラン各都市の商人やウラマーと電信で連絡を取り合いながら全国的な反対運動を展開した。多くの都市住民が参加したこのタバコボイコット運動の結果、国王はタバコ利権の付与を撤回した。

これ以降、イラン立憲革命（1905～11年）、ジャンギヤリー運動（1915～21年）、石油国有化運動（1949～53年）と、英露によるイランの保護国化や資源の独占に抵抗するナショナリズム運動が繰り返された。これらの運動で興味深い点は、マジョリティのペルシア語話者のみならず、トルコ系のアゼリー人や遊牧民のカシュカーイー族やバフティヤリー族、クルド人なども運動に深くかかわっていたことにある。特にアゼリー人は立憲革命において、思想面でも政治面でも中心

的な役割を果たし、イランのナショナリズム運動に不可欠の存在となってきた。

不平等条約を解消し、西欧列強に対抗するために、近代化を断固として推進したのが、カージャール朝を排し、1925年に新たにパフラヴィー朝を樹立したレザー・シャーであった。コサック軍の将校出身のレザー・シャーはまず、軍隊の近代化に着手し、国王就任後は法律や政治から、経済、教育、都市や鉄道などのインフラ整備、人々の服装に至るまで多方面にわたる近代化を強引に推進した。その象徴ともいえるのが、イスラームの教えに従って女性の身体を覆っていたヒジャーブ（ヴェール）の着用を禁止したことであった。

レザー・シャーは、シーア派宗教界の力を抑え、近代化を強力に推進するなかで、イスラーム以前の古代イランの栄光を称揚する官製ナショナリズムを掲げた。ペルセポリスを始めとする考古学的な発掘やペルシア語純化政策が行われ、アラブ・イスラーム的要素を排除して「純粹なイラン」を定義しようとする試みがなされた。その一環として、1935年3月22日にパフラヴィー朝は「イラン」を正式国名として採用した。

6. パフラヴィー朝の独裁化と革命への序曲

1953年8月にCIAが主導する軍事クーデターにより、石油国有化運動を率いたモサッデク政権は転覆された。そして、ローマに亡命していた第2代国王モハンマド・レザー・シャーが帰国し、アメリカの後押しで再び王位についた。国王は秘密警察（SAVAK）を通して国民戦線やトゥーデ（イラン共産）党を徹底的に弾圧し、独裁体制を確立していった。世俗政党のリーダーたちが逮捕、投獄され、ほぼ政治活動ができない状態であった。その一方で、国王が宗教的な権威に対抗することを躊躇ったため、比較的自由な活動が許容されていたのが宗教施設であった。国王に批判的なルーホッラー・ホメイニー師とその弟子たちがイラン各地のモスク・ネットワークを拠点に1960年代から反体制運動を展開した。

ホメイニー師は、1902年にイスファハーン北

西にあるホメイ村で、ウラマーの家庭に生まれた。父のモスタファが彼の誕生直後に土地問題がこじれて殺害されたため、母親の手で育てられた。ホメイニー師はコムでイスラーム諸学を学修後、イスラーム法学や哲学やイルファーン（神秘哲学）を神学生たちに教授した。ホメイニー師が政治活動を始めたのは、ウラマーの政治活動を禁止していたシーア派のイスラーム法学者の最高権威（マルジャ・アッ＝タクリード）のボルージュルディー師が1962年に死去した後のことであつた。

1963年にイラン国王が農地改革や女性の参政権付与などを含む「白色革命」を宣言すると、ホメイニー師は独裁化とイスラームの弱体化を目指す試みであるとして真っ向から反対し、当局に逮捕された。これに抗議して1963年6月にイラン各地の神学生やバーザール商人たちが「ホルダード月の蜂起」と呼ばれる抗議活動を展開し、200人以上の死者が出た。その後、ホメイニー師は国外追放を余儀なくされ、亡命先のイラクのナジャフで後にイラン・イスラーム共和国の基礎となるイデオロギー「法学者の統治（ヴェラーヤテ・ファキーフ）論」を構想した。

シーア派の主流である十二イマーム派では、預言者からイマームたちに宗教共同体の指導権が伝わり、第12代イマームがお隠れの間、イスラーム法学者がその代理であるとする考え方が生じた。19世紀にイマームの代理としてイスラーム法学者にイジュティハード（法解釈権）があると主張した伝統的なウスーリー学派の考え方を発展させ、「イスラーム法学者に統治権がある」と説いたのがホメイニー師のヴェラーヤテ・ファキーフ論である。

1960年代から70年代にかけて国王は豊富な石油収入を基に先進国入りを目指して野心的な工業化政策と、西洋化を推進した。街には欧米から直輸入の自動車や電化製品があふれ、最新のハリウッド映画を上映する映画館にはジーンズやミニスカートの若者たちがデートに訪れた。テレビでも欧米の商品を宣伝するコマーシャルやドラマ

が盛んに放映され、中上流階級は西洋風のライフスタイルを楽しんだ。他方、表現の自由や政治活動を禁ずる国王の独裁的な政策へ不満を募らせていた知識人や貧困に苦しむ下層階級の間では、国王や中上流階級の過剰な「欧米志向」を批判し、「イスラームに帰れ」と呼びかける社会学者のアリー・シャリーアティーやホメイニー師の言葉が新鮮に受け止められ、支持者を増やしていった。

シャリーアティーは、マシュハド生まれの社会学者で、1950年代に父親とともにモサッデクの熱烈な支持者となり、後にイラン自由運動に加入した。1958～1964年のパリ留学中に、サルトルの実存主義やフランツ・ファノンのポスト・コロニアリズムの思想に傾倒したシャリーアティーは、物欲主義の解決と帝国主義への抵抗、そして神の前に平等な社会の実現の鍵をイスラームに見出した。シャリーアティーは「アッラーを民衆で読みかえ、宗教は民衆のためのもの」と述べ、社会学の用語を駆使し、現代の若者に訴える形でイスラームの再解釈を紹介して人気を博した。

国王は軍事クーデターで樹立されたパフラヴィー朝の正当性をアケメネス朝に遡るペルシア帝国に求め、官製ナショナリズムを推進した。1971年にペルセポリスで豪華絢爛たる建国2500年祭が各国貴賓を招待して開催され、1976年にはイスラーム暦からアケメネス朝に遡るパフラヴィー暦へ暦が変更された。亡命中のホメイニー師はイスラームを軽視した官製ナショナリズムと過剰な西欧化政策を痛烈に批判し続けた。

1977年に景気は後退し、経済政策の失敗により約40万人の失業者が出る事態となり、イラン経済全体が不況に陥った。同時期にカーター米大統領によって発表された人権外交の方針を受けて、国王の独裁体制下で沈黙を強いられてきた国民戦線系の政治家や知識人は、民主化要求運動を開始させた。そして、1978年1月にホメイニー師を中傷する記事への抗議デモを行っていたウラマーや神学生に対し、当局が発砲して死者70名以上が出た。それに伴い、殉教者追悼の「アルバイーン（40日追悼）」デモが、40日毎に主要都市で催された。

デモの度に当局との衝突で死傷者が発生し、エンドレスに40日毎のデモが展開する結果となった。

癌が進行していた国王は、決断力が鈍り、周囲の意見にも耳を貸さず、孤立するようになっていた。国王は1978年6月に側近のネマトッラー・ナシーリーをSAVAK長官から解任するなど、抗議運動に対して妥協的な態度をとる一方で、突如、抗議者に厳しい対応の命令を下すこともあった。1978年9月8日、「黒い金曜日」事件で、当局による無差別発砲で多数の死者が発生し、人々の怒りに火をつけた。1978年12月の数百万人が参加したとされるアーシュラーの大行進を経て、軍事力での弾圧をあきらめた国王は1月16日に国外に脱出した。その直後の2月1日にホメイニー師はフランスから帰国した。最終的には2月11日に革命側が近衛部隊の抵抗を抑えて勝利した。

1979年3月の選挙で「イスラーム共和国か否か」を選ぶ選挙が実施された。自治を求めているクルド人勢力やリベラルなグループの中には、「民主的な共和国」の選択肢がないことを不満として選挙をボイコットするグループも現れた。ホメイニー師のカリスマ性とモスクを拠点とした動員力を誇ったイスラーム勢力が、選挙やアメリカ大使館占拠事件（1979年11月4日）、1980年9月のイラクによる侵攻などの国家の危機を巧みに利用して、他のグループを排除し、権力の中樞を握っていった。イスラーム政権下では、シーア派ムスリムのアイデンティティが上位に置かれ、民族的なアイデンティティは「イスラーム共同体」を分裂させるものとして否定された。

1979年以降、古代ペルシア帝国から継承される歴史やゾロアスター教の伝統を示すシンボルはイスラーム政権によって忌避された。イランでは新年（ノウルーズ）直前の水曜日の夜にゾロアスター教由来の「チャハールシャンベ・スーリー」と呼ばれる火祭りが行われるが、革命後2年間禁止されていた。しかし、国民の間では古くから続く伝統や歴史への愛着は深く、当局に隠れて伝統を維持する人が後を絶たなかった。

イラン・イラク戦争中、イスラーム政権は国土防

衛のために、イラン人のナショナリズム感情に訴えて戦争協力に動員する必要があったため、非イスラーム的伝統文化への規制を徐々に緩和した。現在ではチャハールシャンベ・スーリーの火祭りは黙認され、アケメネス朝の歴史やフェルドゥーシーの詩も学校で教えられるようになっている。

7. イラン革命の周辺地域への影響

1979年の革命後、イランは親米国から一転して十二イマーム・シーア派イスラームを国家原理とするイラン・イスラーム共和国に変化した。それに伴い、革命の指導者ホメイニー師は、新たな外交方針として西側諸国にもソ連にも与せず、反植民地主義を軸に非同盟諸国と連帯する「東西不偏」の原則を打ち出した。また、イランのイスラーム政権は、中東各地の世俗的な権威主義体制下で弾圧されている「被抑圧者」たるムスリムを「革命の輸出」を通して解放する外交政策を掲げた。こうした政策は、湾岸諸国のリーダーたちに国内のシーア派住民を利用したイランによる内政干渉と受け止められ、イラクによるイラン侵攻をもたらした。1980年から8年にわたるイラン・イラク戦争において、「革命の波及」を恐れる湾岸諸国は、揃ってイラクに味方した。

革命に共鳴したイラクや湾岸諸国のシーア派ムスリムによる政治活動や、イスラーム革命防衛隊によるレバノンのヒズブッラーの組織化などの動きはあったものの、現実には、シーア派マイノリティの権利向上要求運動の色彩が濃く、イスラーム体制樹立には程遠かった。また、イラン・イラク戦争においてイラン政府は「国土防衛」に追われ、1984年頃から政府レベルでは「革命の輸出」から「現実主義」外交に転換し、欧米との関係の改善を模索するようになった。その一方で、革命によってイスラーム国家が現実に実現したことは、アル＝カーイダのようなスンナ派の過激派組織にも一定のインスピレーションを与え、中東各地で宗派間の緊張を高め、一部のアラブ諸国によるシーア派マイノリティへの警戒や弾圧を強めるなど、中東地域秩序に波紋を投げかけた。

8. 革命後の社会変化

革命後の権力闘争の結果、主導権を握ったホメイニー師の弟子たちは同師の権威を利用してイスラーム法に則った政治、社会、文化、生活の構築を目指した。イスラーム政権は王政期の行き過ぎた西洋化とアメリカへの従属的な政策への反省を込めて「腐敗堕落した西洋文化」の流入を禁止した。そして、固有のシーア派イスラームに基づく革命文化を育成し、世界に発信しようとした。そのため、ポップスやロックなどの欧米の大衆音楽やハリウッド映画、女性歌手によるコンサートやアルバムの発売は禁止され、映画やドラマにおける男女の性的な接触は厳禁となり、女優のヒジャーブ着用は必須条件となった。

1979年3月7日、ホメイニー師は全ての女性に公共の場所でヒジャーブを着用するよう布告を出した。イスラーム政権の指導者たちは、肌を露出させた女性たちで溢れる西洋メディアを「道徳的退廃」と「女性の商品化」と批判し、ヒジャーブは欧米文化の侵略に対する「イスラーム文化の擁護」であると主張してきた。確かにヒジャーブは男性の性的な視線から「女性の貞潔と名誉を保護」し、ある意味、今日の資本主義社会の抱える課題であるルッキズム（Lookism）や過剰な消費へのアンチテーゼとなっている。ヒジャーブの強制政策は、イスラーム体制下での女性の進学や就職を促進したという側面はあるが、自由に服装を選べない状態に息苦しさを感じる女性は少なくない²。

イスラーム政権は、「イスラーム的な価値観の擁護」に注力する一方で、「反動的なイスラーム体制の復古」と批判する欧米世論に対抗するため、地方での近代化と教育の普及に邁進してきた。その甲斐あって、現在では僻地にも水道、電気、ガスが普及している。革命前に比べて、教育、医療、社会インフラへのアクセスは大幅に改善し、国民の生活水準も全体として向上した。教育面でも、1976年時点で15歳以上の識字率は36.5%であったが、2023年には85.5%に達し、若年層に限ると98.1%に上り、大学進学率も58.7%（その6割が女子）と高く、人口の85%がインターネットを利用

する（UNESCO 2023; 世界銀行 2024）。

イラン革命は、単なる「過去への後退」ではなく、「西欧的価値観」や「行き過ぎた資本主義」に対するアンチテーゼとして、シーア派イスラームの教義とマルクス主義などの革命理論の要素を結び付けることで、西欧近代とは異なる独自の近代化モデルを提示したと評価することができる。その一方で、革命の結果成立したイラン・イスラーム共和国は、宗教的権威と共和制、革命理念と国家統治、社会的平等と市場経済など、相互に緊張関係を伴う要素を内包しており、その近代化のあり方は多くの矛盾を抱えていた。

9. イスラーム革命防衛隊の伸長

イラン・イラク戦争の終結の翌年、1989年にホメイニー師が亡くなった後に最高指導者に就任したハーメネイー師は、イラン・イラク戦争の前線で主力軍として闘ったイスラーム革命防衛隊と、国会で可決された法律がイスラーム法に則しているかどうか、そして選挙に出馬する候補がイスラーム体制を担う資格があるかを審査する監督者評議会とを最大限に活用してライバルを牽制し、権力基盤の強化を図ってきた。

革命防衛隊は、1979年にホメイニー師の指示でイスラーム革命体制を護持するために、パフラヴィー朝国王の創設した国軍に対抗して設立されたエリート軍団である。イラン・イラク戦争で国土防衛の要となった革命防衛隊は、独自の陸軍、海軍、航空宇宙軍に加え、対外工作を担うゴドウス軍、サイバー戦争に特化した部隊や無人機部隊、建設や経済事業を担うハータム・アル＝アンビヤー建設本部などその範囲と規模を拡大させてきた。

2006年以降の経済制裁で欧米企業がイランから撤退すると、ハーメネイー師の庇護の下、革命防衛隊傘下の企業が優先的に国家事業で入札することが増えた。さらに2000年代半ばから国政進出する革命防衛隊出身者が増えたことにより、同隊は軍事は勿論のこと、経済界と政界に隠然たる影響力を持つようになっていった。

イラン・イラク戦争ではイラン側の死者・行方

不明者は約 50 万人とされ、そのうち 9 割を軍人が占めた。多数の犠牲者を出した革命防衛隊は「イスラーム革命の護持」と「殉教者精神の継承」を掲げて組織の正当性を主張してきた。近年、革命防衛隊の経済権益拡大に反比例して、民間企業の経済的な機会が縮小する傾向にあり、その「特権階級化」に不満を抱く一般市民も少なくない。

革命防衛隊の影響拡大には、2018 年に一方的にイラン核合意から離脱したトランプ大統領の「最大限の圧力政策」も一役買っている。アメリカやイスラエルの攻撃に備えるという理由で、革命防衛隊を中心に強硬保守派がますます勢いづく結果となった。

10. 2022 年の「女性、命、自由運動」

1979 年の革命後、民主化を求めた 1999 年の学生運動や 2009 年大統領選後の抗議運動の「緑の運動」、経済的な不満を原因とする 2017 年、2018 年、2025 年末の抗議運動などいくつかの大規模な抗議運動が展開されてきた。都市中間層のみならず、全国の様々な階層の人々が参加した点と今後のイランを担う Z 世代の若者たちが先頭に立って抗議を率いた点で特筆すべきなのが、2022 年の「女性、命、自由運動」である。

2022 年 9 月 13 日にクルディスタン州サッケズ市からテヘランを訪れていた 22 歳のクルド系イラン人の女子学生マフサー・アミーニーが「ヒジャーブの不適切な着用」を理由に宗教警察に逮捕され 3 日後に亡くなった。警察による暴力死を疑う人々が故郷のクルディスタンを中心に抗議活動を始め、瞬く間に全国に広がった。

抗議活動の主要な担い手は 10 代～20 代の若者たちであった。デモ行進の先頭に立った少女たちはスカーフを脱ぎ捨てて焼き、髪を切るパフォーマンスを繰り上げた。抗議の輪は拡大し、授業ボイコットが高校や中学校まで広がった。治安維持軍が容赦なく鎮圧を図ったために、551 名の死亡者が出たとされる³。デモに参加した大学生の退学処分や逮捕、見せしめの処刑など厳しい処罰が相次いだ。その結果、運動は半年後には収束して

いったが、若者たちの体制不信とスカーフ不着用の行動はその後も続いた。

なぜイランの Z 世代の若者たちは、危険を顧みず、抗議運動に参加したのか。アメリカと敵対して経済制裁を受けているイランでは、経済難のために若者の失業率が高い。イランの Z 世代の多くは、長引く経済不況と格差の拡大、政府の失政と汚職の蔓延といったイスラーム体制の機能不全を目撃し、革命防衛隊や政府高官などのコネがない限り、就職や結婚は難しいと将来を悲観している。彼らは、インターネットを通じて他国の若者たちの自由な生活を知って現状への不満を募らせ、国政選挙の形骸化により体制を内側から変えることは困難との認識を強めるなかで、マフサーの死を契機に不満を一気に表出させたと考えられる。

若者たちによる一連の抗議運動を好機ととらえたトランプ大統領やイスラエルのネタニヤフ首相は、2026 年に「イスラーム体制」を内側から崩壊させるよう盛んに呼びかけた。当初、イラン国内ではハーメネイー最高指導者の死を喜ぶ声もあった。しかし、戦争による被害が拡大し、知人や家族が殺害されて日常生活が破壊されたことにより、多くのイラン人が侵略戦争に怒りを募らせるようになった。「イラン文明を破壊しようとする」外部からの攻撃は、イスラーム体制に不満を抱いていた一般国民にも愛国心を呼び覚まし、アメリカやイスラエルに呼応して体制転換を目指す大規模な蜂起には至らなかった。

11. おわりに

「イラン人」としてのアイデンティティは、外敵の侵攻を受けながらもイラン高原を中心とする領土と文化を守り続けてきた歴史的経験、ゾロアスター教由来の伝統、ペルシア文学、シーア派信仰などを基盤として形成されてきた。近代に入ると、ヨーロッパ帝国主義列強への抵抗を通じて「イラン人」としての一体感が強まり、立憲革命による議会の設立と憲法制定を経て、近代的な「イラン国民意識」が形成された。

その後、パフラヴィー朝は古代ペルシアを称揚

する官製ナショナリズムと急速な西欧化政策を推進したが、これに対して「イスラーム回帰」の動きが広がった。一方、革命後にはイスラーム政権による宗教的統制が進むなかで、逆に「世俗化」が進展した。このようにイラン人は、外部からの圧力には「イラン国民」として結束する一方、国内の強制や権威主義には反発し、自由を希求してきた。この不屈の精神はワールドカップにおけるイラン代表の姿にも表れている。

「イラン人」のアイデンティティは、歴史への誇り、外圧への抵抗、自由への志向、そして民族・宗教などの重層的な帰属意識によって形成されている。その根底には、外国の介入にも国内の権威主義にも屈しない精神が存在すると考えられる。

イラン・イスラーム共和国は、十二イマーム派シーア派の信仰と革命イデオロギーを国家の正統性の基盤としてきた。しかし、国民を統合するために、イスラーム政権は数千年にわたるイランの歴史・文化・領土への帰属意識に基づくナショナリズムも取り込んできた。近年は、この二つの統合原理の間に緊張関係が生じ、イスラーム体制の理念と人々の帰属意識との乖離が拡大している。

世界を知る扉としてのワールドカップ—大國と富者のエゴで色褪せたサッカーの祭典

2026年6月11日からアメリカ、メキシコ、カナダでワールドカップが始まり、世界中から史上最多の48か国が参加した。メッシやエムバペ、ハーランド、ハキミなど世界のスター選手が名プレーを繰り広げ、ブラジルと互角に戦った日本や人口約53万人で初出場のカーボベルデが健闘し、手に汗握る数々の名試合・名シーンが生まれた。最終的に「無敵艦隊」と呼ばれ、高い守備力を誇るスペインが優勝した今回のワールドカップの華々しい舞台の陰で、多くの問題も残した。

2026年2月に始まった戦争の影響で、イラン代表の選手やスタッフへの査証発給は直前まで遅れた。査証取得後も、当初予定していた米アリゾナ州での事前キャンプは認められず、メキシコでの

調整を余儀なくされた。さらに、イラン代表は試合前日にしか開催都市への入域を許可されず、試合終了後も24時間以内の米国出国を求められるなど極めて厳しい条件下で大会に臨んだ。それにもかかわらず、イラン代表はエジプト戦とニュージーランド戦で先制点を許しながらも粘り強く追いつき、不屈の精神を示した。

今回のワールドカップは、なぜイラン選手はこのような差別的な待遇を受け、一部の国のサポーターや審判は入国さえ許可されなかったのか、平和の祭典とされるスポーツの試合でなぜ国籍差別や人種差別が起きてしまうのか、チケットが高額化し、メキシコではデモ活動が起きたように、貧しい人の生活を無視した金持ちの祭典になっているのではないかとといった大きな課題を投げかけている。イランや中東の問題に関心のない高校生でもワールドカップや物価高など身近な問題から、中東情勢について考えてもらいたい。

参考文献

- 1 Gnoli, Gherardo. "IRANIAN IDENTITY ii. PRE-ISLAMIC PERIOD," *Encyclopaedia Iranica*. Published December 15, 2006.
 - 2 桜井啓子『現代イラン——神の国の変貌』岩波新書、2001年、147-148頁。
 - 3 United Nations, "HRC Press Conference - Fact-Finding Mission Report on Iran - 18 March 2024," <https://www.unognewsroom.org/story/en/2100/hrc-press-conference-fact-finding-mission-report-on-iran-18-march-2024/6343>, accessed on July 26, 2026.
- 大塚和夫他編『岩波 イスラーム辞典』岩波書店、2002年。
加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版、1975年。
富田健次『ホメイニー——イラン革命の祖』山川出版社、2014年。
貫井万里「第二次世界大戦後のイラン——モハンマド・モサッデクと二人の国王」『アジア人物史第11巻——世界戦争の惨禍を越えて』集英社、2023年、589 - 653頁。
八尾師誠『イラン近代の原像——英雄サッタール・ハーンの革命』東京大学出版会、1998年。
吉村慎太郎『イラン現代史——従属と抵抗の100年』有志舎、2020年。
アリー・シャリーアティー（櫻井秀子訳）『イスラーム再構築の思想——新たな社会へのまなざし』大村書店、1997年。
ハミッド・ダバシ（田村美佐子・青柳伸子訳）『イラン、背反する民の歴史』作品社、2008年。